

プッサン作《アポロとダフネ》
(ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク蔵)について

木村 三郎

プッサン作《アポロとダフネ》

(ミュンヘン・アルテ・ピナコテーク蔵)について

木村 三郎

要 旨

Saburo KIMURA, 《A propos d'Apollon et Daphné de Nicolas Poussin(Munich, Alte Pinacothek)》, *Research in Arts,College of Arts,Nihon University*, 2013,no.57.L'auteur a précisé l'information fondamentale en même temps que la fortune critique du tableau.Il a en particulier essayé de présenter les details du tableaux(Fig.1-7), les deux gravures en rapport par Chauveau(Fig.9-10) et les documents comme le guide du musée en München en 1777-78(Fig.11-12). Il a aussi analysé la fortune critique à partir d'Andresen(1863, Fig.14) jusqu'à Panofsky(1950). Avec cela, il a essayé de préciser la méthode de documentation des gravures d'Andresen qui a beaucoup influencé Groutoff(1914, Fig.15). Les études anglaises et américaines comme Blunt(1938), Panofsky(1950) sont, d'un autre côté, formalistes et iconographiques.L'article fait suite à l'ancien article par l'auteur, 《Autour de Rubens et Poussin:à propos de l'iconographie d'Apollon et Daphné de la Renaissance au baroque》, *Research in Arts,College of Art, Nihon University*, 2008, no. 48, p. 55-72. <http://www.kite.ne.jp/pre/saburo-kimura/pdf/2008a.pdf>

Key Words :

Nicolas Poussin, Apollon, Daphné, Alte Pinakothek, München, Félibien, Ovid, Andresen, Groutoff, Friedlaender, Blunt, Panofsky

1 作品の基礎情報 Information fondamentale

筆者は、数年前に本誌に論文「ルネサンスからバロックにかけて描かれた《アポロとダフネ》の図像展開について……ルーベンスとプッサンの周辺」(二〇〇八年)を発表している。本論文は、その続編をなすものである。先の論文では、ステホウの先行研究をたまたまき台にしなが、作品に描かれた登場人物の数を判断の基準にして、比較し、ルネサンスからバロックにかけての作品群に分類の試みを行った。本論文では、そこから得られた知見を前提にし、図1-7に示した、プッサンが描いた、同じタイトルを持った作例についての基礎情報と先行研究を紹介する。

本作品は、現在、ミュンヘンのアルテ・ピナコテークに所蔵されている。この作品についての先行研究は、参考文献一覧に掲載されている。若干の項目に、その内容についての注釈を入れている場合がある。なかでも重要なものは、(1665)1725 FELBIEN;1951 WEIGERT ; (1955)1957 WILDENSTEIN ;1966 BLUNT の資料であるが、この作品に関して集中的に論じた研究は存在しない。

以下、*を付したものは、基本的には図説版画に関する資料である。

一' 所蔵美術館 Numéro d'inventaire du Musée

ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク、所蔵目録番号 2334

二' タイトル Titre

主要な目録等のものを列記するが、大きな変化はなく踏襲されている。

1667 CHAUVEAU, *Daphné changé en laurier*

(1685)1725 FELIBIEN, *Apollo et Daphne*

1837 SMITH, *Apollo and Daphne*

1856 LE BLAN, *Apollo poursuivant Daphné, qui est changée en laurier**

1914 GRAUTOFF, *Apollo und Daphne*

(1955)57 WILDENSTEIN, *Daphné changée en laurier**

三' 寸法 Dimension

97,2 x 130,9(1972 APMJ).

所蔵美術館であるミュンヘン、アルテ・ピナコテークの記録を採用した。

四' 来歴 Historique

一六六七年、パリに所蔵されていて、版画家ショウオーが実見し、版刻している。

一六八五年、ガマール・デ・シャヌ (M.Garnard des Chasses) 邸の陳列室に所蔵されていた (1685 FELIBIEN)。

一七五一年以降、ミュンヘン・ヒトテンフェンブルク宮所蔵 (1972 APMJ) (ツラウトフによると、恐らく一八五一年、という指摘があるが、詳細は不明)。

一七八一年までに、バイエルン選帝侯のコレクションに所蔵 (1966 BLUNT)。

一九一四年には、ミュンヘン・シュライムスハイム宮 (Schleibheim) に所蔵されていた (1914 GRAUTOFF, 1914 FRIEDLAENDER)。

一九三二年の時点では、ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク所蔵 (1932 STECHOW)。

五' 模写 Copies

二点の模写の存在が指摘されている。

① ユシエール Humières 元帥の資産の中に所蔵されていた記録がある (一六九四年)。(1955,57 WILDENSTEIN)。

② エヴル美術館 Musée d'Evreux 蔵。若干の変更が加えられたものが、指摘されている (1966 BLUNT)。

六' 制作年 Date d'exécution

ブッサン研究者等による主要な見解を、纏年で列記する。

グラウトフの見解・・・一七三〇—一七三五年 (1914 GRAUTOFF, II)

ステホウの見解・・・一六三〇年代の初期 (1932 STECHOW)

ブラントの見解・・・ブッサンの画歴の初期 (1966 BLUNT)

形態の弱さ、あるいは、タフネやタビ下の精彩のない色彩は、ブッサンの《ナルキッソスとエコー》(ルーヴル美術館所蔵)に近いこと、一方で、タフネの顔、特に眼の形は、《嬰児虐殺》(プティ・バレ所蔵)の左の群像の中の母親の顔に近いことが根拠とされている。

テュイリエの見解：明らかに、ブッサン作《ゲルマニクスの死》(一六二八年制作)

よりも前の時期 (1974 THULLER)

七' 複製版画 Gravures en rapport

作品記述

以下に示した2点は、絵画自体とは左右が逆転した構図である。版刻のために、様々な種類の線を駆使した印象が強い。遠近表現に優れ、前景に形成された三角形構図には、ダイナミックな形態感覚を実現している。個々の線描に周到な技術が使

われていて、確かな効果が認められる。なかでも、前景下を深く描く技術に長け、版画という表現媒体でありながら、右手背景には、遠景にまで連なる遠近感と、一方、前景には、アポロとダフネ、そしてペネイオスという人物群が織りなすモニュメンタルな構成が実現している。観察の結果、ブッサンの作品のオリジナルを真見していなければあり得ない表現ではないか、という印象を得た。

なお、基本的な所蔵データは、1951 WEIGERTに準じた。また、記銘の転記には、(1955)1957 WILDENSTEIN,p.181を参考としたが、誤りは訂正した。

複製版画ー(図6)(部分的に記銘が書き込まれている版画) Fig.9

フランス国立図書館版画部蔵 Da.16.fol.ED.44.rés.

十枚

315 x 38 cm

右手前景の石の表面に書き込まれている。

F.Chauveau sculp. et ex //

Cum provil Reg//

1667

右手の親面

N.Poussin pinxit

手替親面

右手の親面

右手の親面 F. Mariette 1692

右手の親面 A. PARIS Chez R.Cousinet Sur le Guay des orlebures à Limage St Anne. Avec Privilège du Roy (-)。

複製版画2 (図2) fig.10

(画面の中央に記銘がある版画)

フランス国立図書館版画部蔵 Da.16.f

記銘

右手前景の石の表面

F.Chauveau sculp. et ex //

Cum provil Reg//

1667

右手の親面

N.Poussin pinxit

画面の

右 N.Poussin, pinxit

右 F.Chauveau Sculpt

中央

DAPHNÉ CHANGÉE EN LAURIER

L'Amour pour se venger d'Apollon qui avoit meprisé ses Armes, le bleisa pour Daphné; cette Nymphe après avoir fuy longtems un Amant quelle dedaignoit, et //

près de tember en sa puissance, implore le secours du fleur Penée sonpere, qui la change en kaurier. Metam.d'Ovide Liv.I.Chap.13//

Paris chez Surruque Graveur du Roy. Rue des Noyes[.] les deux[.] C.P.R. (67)

II アンジュレーザンからパノフスキー・ドイッチと英米にわたってなされた「ブッサン作《アポロとダフネ》を巡る神話画研究
Fortune critique sur /Apollon et Daphné de Poussin à partir d'Andresen jusqu'à Panofsky

サンドラルト(SANDRART)の著した文獻「ドイッチ・アカデミー」が、ドイッチにおける早い時期のブッサン文獻であることはよく知られている。しかし、この文獻には、当該作品についての記述はない。このようにして、その刊行年である一六七五―一七九九年頃は、まだ「ドイッチでは認知されていないか」とも考えられる。

(67) ブッサン作《アポロとダフネ》(ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク蔵)について

その後、ミュンヘンに到着することになるが、本節では、この絵画は遅くとも一七五一年以降は、ミュンヘンに収蔵されていたという事実を念頭に置きたい。その上で、ドイツで確立し、その後英米に移植されて発展した、プッサンのこの作品を軸とした神話画、並びに、複製版画研究に関する方法について、若干のコメントを書いておきたいと思う⁽³⁰⁾。

一、ドイツにおける研究 (アンドレーゼンからグラウトフ) Etude allemande d'Andresen (1863) à Grautoff (1914)

ドイツにおける版画史研究の発展については、拙著⁽³¹⁾の中で、既に論じている。その視点で考えると、下記の参考文献にあるように、プッサンの当該作品についての研究では、関連版画についてのA・アンドレーゼン (ANDRESEN, Pousin, 1863) (図14) の記述が重要である。この文献は薄手の冊子に過ぎない。しかし、今日なお、プッサン研究では一級の価値を持っている。版刻されたショウオーの複製版画を記述しているだけでなく、他に二点の版画も記録している。そこから得られる情報は、フランス本国で、一八五六年に書かれていた、C・ル・プランの情報を遙かに凌ぐものである。克明な作品記述、そして、自ら計り直したことが明らかで、個々の作品の寸法、記録の転記、版刻者の特定などの基礎情報は、今日でも超えるものはない。

序文によると、調査の対象は、ロンドン在住であった彫刻家、ノレケンス (Noelkens) の元にあつたものを、ライプツヒヒ在住のヴァイゲル (Vud Weigel) が入手したコレクションが基礎になったとされている。ヴァイゲルは、この図書の出版も行っている。参考文献リストには、この時代にすでに作成されていた、パリ、ライプツヒヒ、ドレスデン等にあつた他のコレクションの名称も記録されている⁽³²⁾。いずれにせよ、オリジナル作品を前にした克明な観察と記録がなされたであろうことは確実である。参照文献としても、LE BLANC, Manuel; SMITH だけでなく、先行研究は網羅されている。ドイツが、十八以降、フランスで制作された版画を中心に鋭意収集し、その成果に基いて完成された業績である。執筆内容は、写真技術というものが美術書には未だ応用されていない時代における訓練の行き届いた記述力の成果といえる。一九世紀後半におけるカタログ美術史の成功例である。

ところで、その後の、一八九三年、やがて西洋近代の美術史学において重要な意

味を持つこととなる、ウィーン学派のA・リーゲルが「美術様式論」(RIEGL, *Stilfragen*) を刊行する。リーゲルは、芸術意思に誘われる形態の発展過程を、比較記述を試みながら分析することができた。それに続いて、H・ヴェルフリンが「古典美術」(WOLFFLIN, *Die Klassische Kunst*) を刊行されるのが一八九九年である。ここでは、ラッファエロをはじめとした作品について、やはり比較記述も意識した様式分析を行っている。

一方で、本論者が対象としている、プッサン作(アポロとタフネ)についての学術性のある分析は、一九一四年に執筆された、W・フリードレンダー (FEIST, P.H., *MKL*, p.104-107) とO・グラウトフの著作から始まる。フリードレンダー (図15) は、フェリビアン (一六八五年) や、アンドレーゼン (一八六三年) の資料を丁寧に引用しながら、関連した基礎情報を記述している。奇しくも、刊行はミュンヘンの出版社である。

一方で、同年に刊行されたグラウトフ (図16) では、写真図版を掲載したこともあり、一気に、客観性のある分析が動き出すこととなった。たとえば、今日においても基礎となる分析を、作品記述として十数行に書き込んでいる。とりわけ、前景右手の樹葉の表現に、筆者の想定では「セザンヌ」を指すと思われる「現代のフランス画家」の手法を認めることができる⁽³³⁾。他方では、色彩には、ティツィアーノからの影響を指摘している。一九一四年という年には、この作品がミュンヘンに収蔵されている事実を勘案すると、いかにも、作品を実見し、その印象を言語に確実に移した過程が想像される。実際、グラウトフの著作は、ミュンヘンとライプツヒヒにあつた、G・ミューラーから出版されている。一方で、グラウトフの場合、プッサンの作品をカタログ美術史の方法で整理していて、これは、アンドレーゼンの方法を学んだ成果であつた。

一九三三年、拙論(二〇〇八)で詳述した、「アポロとタフネ」の古代以降の図像展開についてのステホウ (STECHOW) (BETHOUSEN, *P.MKL*, p.307-400) の精緻な論考が刊行される。その中には、プッサンの当該作品についても、先行研究を咀嚼し、引用している。再説は控えるが、ワールブルグ学派がプッサンの作品に関与した、異なった包丁さばきを見せた秀作である。

二、イギリスとアメリカにおける研究(プラントからパノフスキーへ)

Etude anglaise de Blunt(1938) à Panofsky(1950)

E・パノフスキーが一九三六年に刊行した記念碑的な意味を持つプッサン論「われ、また、アルカディアにありき」(PANOFSKY, *Aradia*, 1936) についてはここでは触れない。しかし、その刺激の強い図像解釈学的な論文に触発されたいくつかの論考の中に、一九三八年刊行の、A・プラントの分析がある。拙論(二〇二二)では、一九三九年刊行のプラントの秀抜な宗教図像論(BLUNT, 1939, *Trichium*)を紹介した。当該絵画についても、次の時代のプッサン研究を担うこの若き俊秀は、伸びやかな筆致で、様式分析に一石を投じている。たとえば、図13に示した、プッサン作の《バクトロス川で身体を洗うミダス》との様式上の類似性を指摘している。そこには、中心人物を必ずしも画面中央に描かず、取って右手に配置するという着想が共通していること、そして、対角線を使った構図であり、マネエリスム的な感覚が残った造形世界であることが、丁寧に指摘されている。小論ではあるが、グラウトフには見られない、プッサンの作品への形態論的な切り込み込みが明快である。

一方で、この時期、つまり両大戦間に、ドイツの美術史研究者が多数アメリカに移住したことはよく知られている⁶⁶⁾。一九三五年に既にアメリカに渡っていた、前述のフリードレンターもその中の一人であった。その後の、一九三九年に、カタログ・レゾネである「ニコラ・プッサンの素描」の第一巻をプラントと、R・ウィットカウアーと共同で刊行する。序文にも書かれているように、アンドレーゼンの方法を十分咀嚼し、一方で、それをイギリス実証主義の方法で、素描目録としたものである(FRIEDLAENDER and BLUNT, *Drawings, Poussin*, 全五巻の完成は一九七四年)。

彼は、一九四〇年、「アメリカにおける最初のプッサン展」(*Art News*)とこう報告を刊行している。そして、そうした経験に基づき、一九四二年に、ガゼット・ボザール誌に、「アメリカの公的機関におけるプッサンの作品についての図像学的研究」を発表する。総じて翌年にそのまとめた総論を刊行する(1943 FRIEDLAENDER)。それらは全般的には概説的な論文文を言える。しかし、カルタリーの神話学やローバの「イコノロギア」の重要性を指摘しており、一方で、《アポロとダフネ》を含むプッサンの神話画に関する制作年代について、基本的な判断基準を提案しており、その後の研究の基礎をなしている⁶⁷⁾。

本紹介の最後に、やはり、プッサン作の《アポロとダフネ》を論じた、パノフスキーの著名な論考(1950 PANOFSKY)に触れて置かなければならない。邦訳すれば、「プッサン学会研究誌」ともいうべき学術誌が、短期間だけこの時期に刊行されている。しかし、そこに発表されたこの論考は、ミュンヘンの作品に関しては、一行だけ主題について触れているだけである。論文内容は、主に、ルーヴル美術館所蔵のプッサンの最晩年の作品《アポロとダフネ》についての分析である。典拠論N・コメスの「神話学」(二六二二)、B・ド・ヴィージェネール「フィロストラトスの画像論」(二六二九)を引用し、詳細に論証を試みている。これらの認識は、現在では常識となっているものであるが、この時代のプッサン研究ではすこぶる斬新な見解であった。ハンブルクを発祥地とするワールブルグ学派の種子が、一九五〇年に、アメリカに移植されて花開いたものともいえる。プッサンが、繰り返して描いたこのテーマを考える際には、避けては通れないものである。

本章は、アンドレーゼンの研究(一八六三年)から、パノフスキーの論考(一九五〇年)までに絞って、先行研究史に見られるドイツ的な方法について述べた。ミュンヘンの《アポロとダフネ》については、下記の参考文献リストに、その後の研究も記述してある。これ以降、プッサンの神話画研究自体は、アメリカを中心に、パノフスキーの弟子筋から多数の成果が陸續として登場して来る。遺憾ながら、本稿では趣旨も異なり、紹介の作業のためにそこまで手を広げる余力はなく、それ故に、対象をしばらくこむこととした。しかし、ステホウとパノフスキーの研究成果があったためか、《アポロとダフネ》論では、論点が出尽くした印象が強く、文学研究者側からの研究を除いて、その後、纏まった仕事は確認できていない。

III 参考文献 Bibliographie avec commentaire

I 省略記号 Abreviation

AB: *The Art Bulletin*

ANDRESEN, Poussin, 1863: ANDRESEN(A), Nicolas Poussin, *Verzeichniss der nach seinen Gemälden gefertigten, gleichzeitigen und späteren Kupferstiche*, 1863, R. Weigel

ANDRESEN-WILDENSTEIN, *Poussin*,1962 ;ANDRESEN(A.),《Catalogue des graveurs de Poussin, par Andresen》, GBA,LX,p.139-202,trad. française abrégée avec reproductions par WILDENSTEIN(G.),1962

APM: Alte Pinakothek München

BELLORI,VITE:BELLORI(G.P.), *LE VITE DE' PITTORI,SCVLTORI ET ARCHITETTI MODERNI*,1672,ROMA,Mascardi; 複製版 . 1980,Broude International.

BELLORI, VITE(BOREA):BELLORI (G.P.), *Le vite de'pittori,scultori e architetti moderni*,1976,G. Einaudi,a cura di E. Borea.

BLUNT,1966, *Poussin*: BLUNT(A.), *The Paintings of Nicolas Poussin, A Critical Catalogue*, 1966. Phaidon

BLUNT,1939,Triclinium: BLUNT(A.), 《The Triclinium in Religious Art》, *JWCI*,1939,II,p.271-276

DBE :Deutsch biographische Enzyklopädie,2005-2008,Saur,12 vol.

FELIBIEN, *ENTRETIENS*:FELIBIEN(A.), *ENTRETIENS SUR LES VIES ET SUR LES OUVRAGES DES PLUS EXCELLENS PEINTRES ANCIENS ET MODERNES*.1666-88.PARIS.S.Marbre-Cramoisy,etc.,5 vol.; 複製版 1972, Minkoff,3 vol.

FLORENT LE COMTE : FLORENT LE COMTE, CABINET //DES SINGULARITEZ//D'ARCHITECTURE,//PEINTURE,SCULPTURE,//ET GRAVEURE// PARIS,1699-1700,3 vol.,N.Le Clero; 複製版 1972,Minkoff.

FRIEDLAENDER, *Poussin*,1914:FRIEDLAENDER(W.), *Nicolas Poussin, die Entwicklung seiner Kunst*,1914,R. Piper

FRIEDLAENDER and BLUNT, *Drawings, Poussin*: FRIEDLAENDER(W.), and BLUNT(A.), *The Drawings of Nicolas Poussin. Catalogue raisonné*, 1939-1974. Coll. Studies of the Warburg Institute,Warburg Institute,5 vol., I:1939; II:1949; III:1953; IV:1963,V:1974

GAULT DE SAINT-GERMAIN: GAULT DE SAINT-GERMAIN(P.M.), *Vie de Nicolas Poussin*,1806,A.-A.Renouard

GBA : *Gazette des Beaux-Arts*,

GRAUTOFF, *Poussin*:GRAUTOFF(O.), *Nicolas Poussin*,1914,G.Müller,2 vol.

IFF:Inventaire du fonds français. BN

LE BLANC, *Manuel*:LE BLANC(C.), *Manuel de l'amateur d'estampes* , 1854-1889(s.d.), E.Bouillon,4 vol.

MAGNE :MAGNE (E.), *Nicolas Poussin,premier peintre du roi,1594-1665*, 1914,G.Van Oest

MKL: *Metzler Kunsthistoriker Lexikon*, 1999, Metzler, BETTHAUSEN(P.), etc.

PANOFISKY, *Arcadia*,1936:PANOFISKY(E.) 《Et in Arcadia Ego.On the Conception of Transience in Poussin and Watteau》, *Philosophy and History*, The Cassirer Festschrift(Essays presented to Ernst Cassirer), (1936) 1963 Harper & Row,Coll.Harper Torchbooks.The Academy Library, reprinted by arrangement,p. p.223-254

Poussin,Actes,1960: *Nicolas Poussin,Actes,Colloques internationaux*, 1960, sous la direction d'A.Chastel,Centre national de la recherche scientifique,2 vol.

SMITH: SMITH(J.), *A Catalogue Raisonné of the Works of the Most Eminent*

American Public Collections-II. The Metropolitan Museum of Art's King Midas Washing his Hands in the River Pactolus and the Detroit Institute of Arts' Endymion Kneeling before Luna), *GBA*.XXIII,p.26

1950 PANOFSKY(E), (Poussin's Apollo and Daphne in the Louvre), *Bulletin de la Société Poussin* III,p.28-29 ノール美術史研究所の《トピロマンネ》を編じた著者の著述を訳す。

1951 WEIGERT(R.-A.), *IFF*.XVIII. no.154,p.412-413,Chauveau(François).no.154. (Apollo et Daphné)・複製図画の複製を複製した著者の著述を訳す。

(1956)1957 WILDENSTEIN(G.),no.118°.p.181-182

1960 ALPATOVM(A), (Poussin peintre d'histoire), *Poussin,Actes*.I,p.191.トピロマンネの複製を複製した著者の著述を訳す。

1960 BARDON(H), (Poussin et la littérature latine) *Poussin,Actes*.I,p.131

1960 THUILLIER(J), (Tableaux attribués à Poussin dans les galeries italiennes), *Poussin, Actes*.II,p.276,fig.320 (図説)

1960 THUILLIER(J), (Tableaux "Poussinesques" dans les musées de Province français), *Poussin,Actes*.II,p.294

1966 BLUNT.1966, *Poussin*.no.130,p.90-91 カタログ・レヴューの中の二頁にわたる分析であるが、作品分析としては出色のもので、精緻な研究成果がある。ヘローリ(BELLORI, *Vie*.p.444)の記述との関係、作品の損傷の指摘など、全ての論点のたつき合になっている。拙論では紹介できなかった、プッサン自身による同名タイトルの、他の複数の素描と、現在は所在不明と思われる完成作との関係や、そのアトリビューションについても詳しい分析がある。

1969 BADT(K), *Die Kunst des Nicolas Poussin*.rest.p.595,Tafeln.65-66.カントーニ著「複製」の著述を複製した著者の著述を訳す。

1972 APM, *Franzoesische und spanische Malerei*, Bruckmann, Coll.Alte Pinakothek Katalog IV,p.47-49. BLUNT(1966)の複製を複製した著者の著述を訳す。

1974 THUILLIER, *Poussin* no.22,p.86-87,reprd.

1980 WILD(D), *Nicolas Poussin*.O.Füssli.I,p.185 .II,p.280,R44(François Perrier 著述を複製した著者の著述を訳す)

1985 WRIGHT(C), *Poussin,Paintings*.A Catalogue Raisonné,Harlequin Books, no. 14,p. 134, reprd.107

1986 GEORGI(J), *Alte Pinakothek München*.no.2334,p.398-400

1988 OBERHUBER(K), *Poussin,The Early Years in Rome*.no.19,p.243

1994 雑誌「トピロマン」『西洋絵画作品の辞典』三巻、五八六頁(なお、制作年については「トピロマン」の著述を複製した著者の著述を訳す)。

1994 THUILLIER, *Poussin*.no.23,p.245,reprd.

2003 LOIRE(S),in *Expo.GÈNES, Metamorfosi del mito à pittura barocca tra Napoli,Genova e Venezia*,Palazzo Ducale,Electa,p.159-166

二〇〇八 拙論「ルネサンスからバロックにかけて描かれた《アポロとダフネ》の図像展開について・・・ルネサンスとプッサンの周辺」『日本大学芸術学部紀要』四八号、五五―七二頁(直接の言及はないが、引用しておきたい)

1 1856 LE BLANC 『Le Apollon poursuivant Daphné, qui est changée en laurier』Nic-Poussin.P. eu Largier état: avant la L. 2015 2015年11月15日現在、この複製版画の複製は認められていない。

1863 ANDRESEN 『Le Vor der Schrift』Andersen 1863年11月15日現在、この複製版画の複製は認められていない。

1692の年記は、コロンターによって作られたプリントが、この年に所蔵されていたことを示している(1955)1957 WILDENSTEIN)

2 GRAUTOFF, Poussin, 1692 von Chauveau による記述が、この複製版画の複製は認められていない。

記述の誤記は、(1955)1957 WILDENSTEIN を参考したが、ミスルには誤りもあり修正した。

3 フランスの造形美術が、この複製版画の複製は認められていない。まず、バイエルン選帝侯マクシミリアン二世 Emanuel (Bavaria) が、スウェーデン継承戦争の後、バイエルンに滞在していた時期(1706-15)が、この複製版画の複製は認められていない。彼は、ルイ十四世の第一王子の養子でもあったからである(Wikipedia)。フランスで学んだこの複製版画の複製は、建築の分野に典型的な事例として現れている。マクシミリアン二世 Emanuel の支援で、キュウイリヒ Francois de Cuvillies がパリに留学し、1710-11から1714年にフランスの建築アカデミーで重要な立場にある建築家であったフロマンテル Jacques-Francois Blondel の弟子として学んだ(HOJERG, DA.VIII,p.288)。複製版画の複製は、マクシミリアン二世 Emanuel の複製版画の複製は認められていない。http://en.wikipedia.org/wiki/Francois_de_Cuvillies

また、フェリドマンの弟子 Jean-Francois は複製版画の複製は認められていない。その後も加わった、ドイツ語版の建築家伝が、十八世紀初めにハンブルクで刊行されている。FELBIENJ-FJ, *Historie und Leben der berühmtesten Baumeister*, 1710,Hamburg. フランス建築がバイエルンの造形美術に与えた強い影響を及ぼしている事実を背景に考えると、ブッサンを中心とした版画の購入とコレクシヨンの成立という事実も同じであることが想定される。この問題は、今後の課題とした。

4 『西洋近代絵画の見方・学び方』左右社、二〇一一年、一九三頁

5 Dijonval,1810,Winckler,1810,Madame la Comtesse d'Ensisdel,1833 による、フランスの所在地、あるいは、十九世紀前半に多く出た複製版画の所蔵作明細の刊行地として、ライプツィヒ、ベルリン、パリなどが記されている。

6 COSERL(A), *Refugee Scholars in America*,1984, Yale UP, p.255-260, トニー・「A. パノフスキーとアメリカにおける「命業」家」の複製版画の複製は認められていない。岩波書店、一九八八年、二八四-二九〇頁

7 ブッサンの神話画研究は、その後、大きな影響を与えられた。たゞ、パンノスキー夫人が著した PANOFSKY(D) (Narcissus and Echo:Notes on the Poussin's Birth of Bacchus in the Fogg Museum of Art), AB1949,6,XXXI,p.112-120 の複製版画の複製は認められていない。また、晩年の研究は、作品分析が、博物館学的な意味で、格段に客観性を帯びるようになった。PANOFSKY(E), *A Mythological Painting by Poussin in the National Museum Stockholm*,1960,Kungl.Boktryckeriet P.A.Norstedt & Soener, Coll.Nationalmusei Skriftserie, NR 5
マイン研究者によるブッサン研究は、現在でも水準は極めて高い。BATSCHEMANN, KEAZOR, HYPPE 諸氏の研究は、フランス以外の国で行われるブッサン研究と比べて、刺激的である。しかし、それらについては本稿の趣旨から外れることもあり、別稿を考えた。

我が国における、ブッサンの神話画研究も高度な水準にある。新畑泰秀、栗田秀法、望月典子、宮島綾子各氏の論考については、筆者のHP
http://homepage3.nifty.com/saburo-kimura/pdf/2011_07_digital_mikata.pdf
を参照された。

☆本研究は、平成二十四年度における、科学研究費・基礎研究(C)、「17世紀フランスにおける歴史画と挿絵本との関係についての総合的研究」、同基礎研究(C)「近代英国を中心とするエンブレムにおける宗教と科学に関する学際的研究」、同基礎研究(B)「ヴァールブルク美学・文化科学の可能性——批判的継承から新たな創造へ」、並びに、芸術学部共同研究費「アート・アーカイブ構築に向けての基礎研究」、同一般研究「日欧と東洋の17世紀における、挿絵と絵画との関係について

のデジタル・アーカイブ基礎研究」にもとづく研究である。

☆本誌の誌編を現在準備中である。また、本学助教授、トゥマルヌ Margurite DEMARNE 氏、並びに、シモン・アルトビナロテーク主任研究員、ヒップ Elisabeth Hipp 氏にお世話になったことを記し、感謝の気持ちとした。

プッサン作《アポロとダフネ》図版

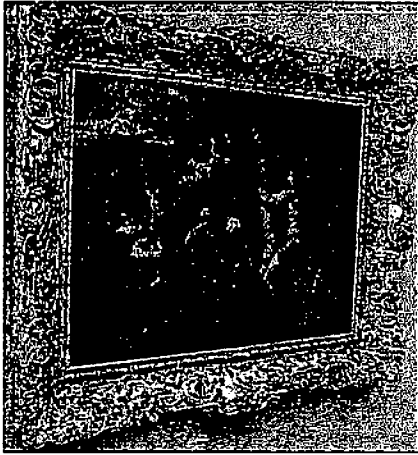


図2 N・プッサン 同前



図1 N・プッサン 1628年以前 画布・油彩 97.2 × 130.9 cm
ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク, 2334



図4 図1の部分

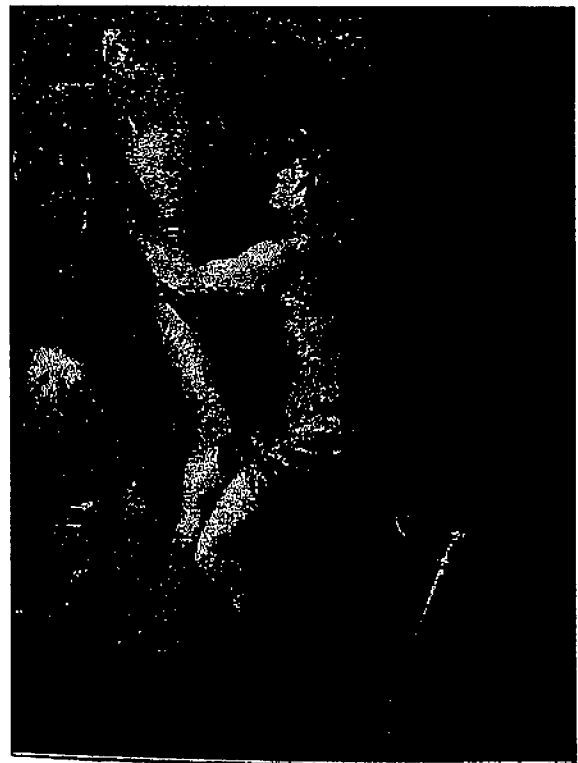


図3 図1の部分



図6 図1の部分



図5 図1の部分

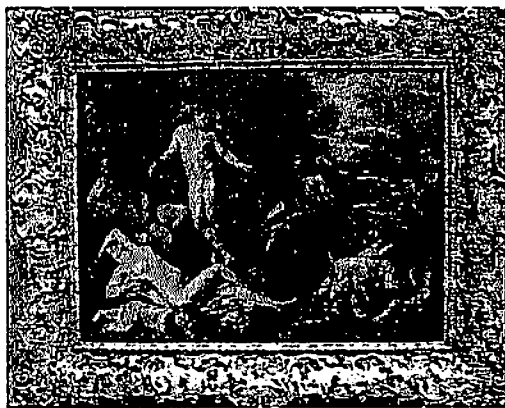


図8 N・プッサン 《バックスの前のミダス》
1629-30年頃 画布・油彩 98 × 130 cm
ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク



図7 図1の部分



図10 F・ショヴォー《アポロとダフネ》ブッサンの同名作品の複製版画2 パリ・フランス国立図書館版画室蔵 31.5 × 38 cm Da.16.fol.:Ed.44.rés.



図9 F・ショヴォー《アポロとダフネ》ブッサンの同名作品の複製版画1 (部分的に記銘が書き込まれている) パリ・フランス国立図書館版画室蔵 31.5 × 38 cm Da.16.fol.:Ed.44.rés.

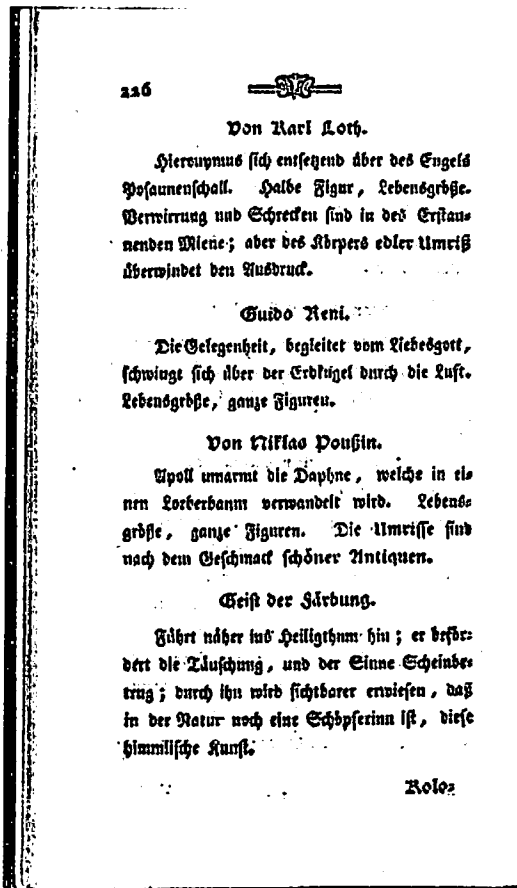


図12 1788 RITTERSHAUSEN(J. S. von). *Die vornehmste Merkwürdigkeiten der Residenzstadt München für Liebhaber der bildenden Künste*. München, Lentner, p. 226 における記述内容

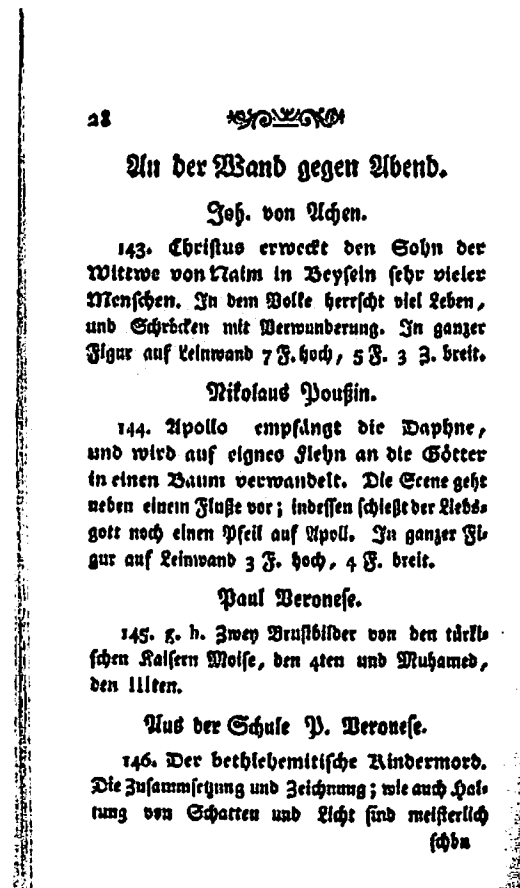


図11 1787 *Die Bildergalerie in München. Ein Handbuch für Liebhaber und Kunstfreunde*. München, p.28 における記述内容 (144参照)

(77) ブッサン作《アポロとダフネ》(ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク蔵)について

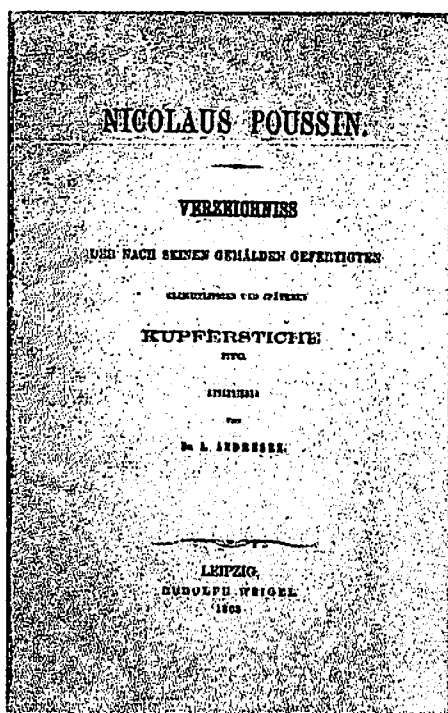


図14 1863 ANDRESEN
タイトル・ページ



図13 N・プッサン《バクトロス川で身体を洗うミダス》
1627年頃、画布・油彩、97.5 × 72.7 cm.
ニューヨーク・メトロポリタン美術館蔵

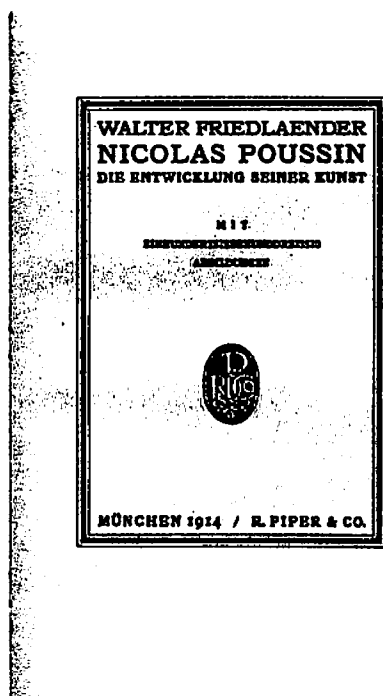


図16 1914 FRIEDLAENDER
タイトル・ページ

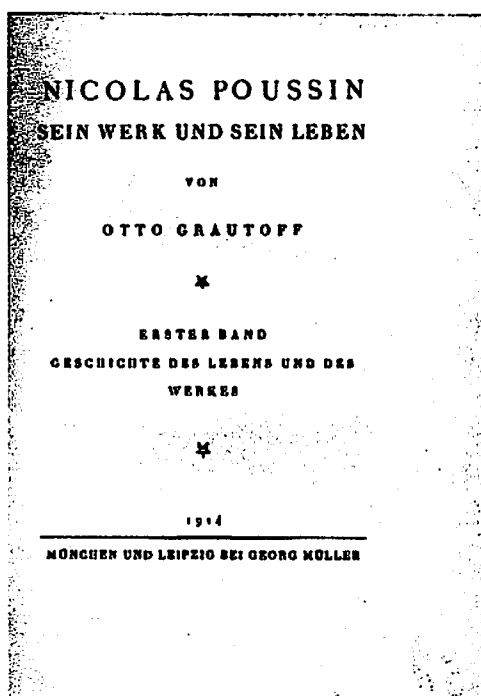


図15 1914 GRAUTOFF
タイトル・ページ